

## 四十二、難値難見

今朝、福山市中井外科において大経を講じて、世尊、阿難の所問を嘆じたもうて、仏世難値を明かしたもうに至る。経に言わく、

「無量億劫難値難見。猶靈瑞華時乃出。」

難値、難見を分つて二とし、聞法の難を難値とし、見仏難を難見とする説あれども、大経流通分に「如来興世難値難見」とあるによれば、難値難見と、重累してこれを説き、その難を慇懃に示すとなす説を可とすべし。和讃またかく示したもうもののごとし。仏の興世にあうこと難値難見、大法にあうこともまた難値難見というべし。和讃に言わく

「如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ

難値難見とときたまひ 猶靈瑞華としめしける」と。

「無量億劫にも如来の興世に値ひ難く見難し」

文の当面は通に似たれども、意はすなわち別途にあり。

「如来に値ふ」とは、ただ単にその肉体を見ることがではない。その教法に値わずば、会うて値わざるものである。如来の興世に値うとは、その教法を聞くことである。しかるに、世尊の教法は八万四千、もし他力弘願の一法に値わずば、世尊出世の本懐を聞かざるものである。

如来の出世は、本願の真実を開かんがためにほかならず、興世に値いがたしとは、本願の真実、弘誓願の大法を開顕したもう如来に値うことが甚難希有であることを示したもうのである。「如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ 難値難見とときたまひ 猶靈瑞華としめしける。」無量億劫の難値難見は、如来の興世、本願真実を開顕したもう如来の興世である。

今さらに大法に値うたる身の幸を憶う。なんたる幸福であろう。人間衷心の歓喜満足は、ただ、大法を聞くにあり。見よ、巨万の富の中に暮らしつつ、それゆえに灰色なる不満の数々をその顔の皺にたたみ、不平愚痴、何ものもなくしてこの世を終わる人の多きこと、恒沙に過ぎたり。貪欲の悪魔に追い使われ、希望という幻影に引きずられつつ、貧苦のままに世を過ぎる一切衆生、貧も富も一切同一に、満たされることなくして、世の中に齷齪たり。すべて衷心の満願と、全我の破闇なきがためである。

その中、真の中の真、専が中の専、円の中の円、満の中の満、頓が中の頓、唯一の真実教によつて、唯一の大行に生かされるものは、大海の沙の一粒にすぎず。

獲ざる者は、得たる尊さを知らず、得ざる者は、得たる世界のありがたさ嬉しき、明るさ、広さを知らず。それゆえに、ほのかにも、大法の真実を信証したるもののみ、その難値難見を知る。

慶ばしきかな。難値難見の弘願の一法に遇うことを得たるわれら。世尊の教法は高く尊く、法城百歳、永遠の未来を照らしたもうに、機はこれ下品の劣機なりとも、権化の大聖のみ聞きたまいし大法は、今、凝集專注して、念仏の大信となつてわが胸にあり。この至幸至福だれか奪うものぞ、世の妖雲来つてわが手を奪い得べし。わが足を切断し得べし。いわんや些々たる名利、これを奪うて、大地の底に埋め得べし、命根すらなおかつ奪い得べし、されど、日本国土に生まれ、不滅の大法に値い得たる幸を奪うべからず。

如来の名号功德、大智慧光明は、久遠の太陽、世の雲霧によつて左右されたまわらず、ゆえに、念を一処にかけて、一道を行歩する者を闇夜の不幸たらしめる何ものもあることなし。

阿私陀仙人は、世尊の人相を見て、世尊の成道の時まで世にあるを許されず、大法の聞かれざるを歎き、天を仰いで、慟哭号泣せりという。これまことに一切衆生の無意識界の声ではないか。

真実教に値わざる者が、いかに焦燥し、熱悩し、悶々せるかを見よ。喜ぶといえども、真の喜びにあらず、悲しむといえどもその焦点の狂えるを見よ。真に悲しむべきを悲しまず、真に喜ぶべきものなきがゆえに。喜んでただ我心自身に貪著せるに過ぎず、悲しんでただ一片の愚痴に過ぎず、何ものも残すことなくして、蒼惶としてこの世を終わる。その深き無意識界には、阿私陀仙人の号泣の声を潜め、しかも自ら覺らずして、営々として外に幻を追うにあらずや。

値うとは、見るとは、その説きたもう大法を信ずること、すなわち獲得することである。値うて信なくば、値わざるに等しい。重ねていう、値うとは、世尊の教法を全我の上に頂戴して如実に修行相応することである。

されど「信」の文字はまた「値う」の文字におきかえて頂かざるべからず。世尊の教法に聞かずして、自ら愚案をめぐらして、信心に至らんとす。難値難見の大法に値うことなくば、如実の大信を成就することは不可能である。

説教の洪水滔々として天下に溢るるに、大信成就して、仏凡一体の至境に光るもの少きはなにゆえであるか、これまつたく、難値難見の感銘なく、世間一片の巷談と同一視するがためではないか。値うて値わざるものである。世の智者、深思せよ。時の尽未来際に悠久なると、明日をも知らぬ草露一旦の浮生の命なることを。

「噫。弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、真実の淨信は億劫にも獲がたし。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ。」

「爰に愚禿親鸞、慶ばしき哉、西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈に遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして己に聞くことを得たり、真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知んぬ。斯を以て聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり」と。

聖人のお慶び、ただこの一事につきる。弘願他力を説くをもって、その出世の本懐となしたもうを世尊とすれば、弘願の一法を聞くをもってその出世の本懐となしたもうはわが聖人である。

大経もとより説聴一如の経、能説の人を世尊とし、聞信の人を正定聚不退の菩薩となしたもう。世尊は、果相を示して如来之徳を行じたまい、阿難は因相にあつて、普賢大士之徳を示す。世尊、阿難にむかつて、難値難見と告げたもう。聖人今、「噫、弘誓の強縁は多生にも値ひ難く」と仰せたもうも宜なるかな。

同行の多くは「どうしたらありがたくなれますか。私はもう三十年もお寺参りをしますが、聞く時はありますがとうございませうが、暫くすると何ともなくなります。続けて喜ばれるようにして下さい。」と言う。

若存若亡の未決定の機においては無理のないことではあるが、これはなぜであるかと言え、難値難見の威力をもつて、必然の相において大法が迫ってきていないがためである。大法が単なる話となつているかぎり、何十年経つても、一切の迷妄を破する力を特たず、大法に値うたこと自体が絶対的なものにならないがゆえに、無我の大信を成就することはできないのである。大法において難値難見の感銘なきものは、世の五欲の境において難値難見の驚きを求めて外に外にと走る。

正法において、難値難見の慶喜を得る者は、仏の智慧眼そのままの信心の智慧を獲たるものである。無上淨信の暁に立つて、世の虚妄の真相がほのかに見えそめてくる時、大悲の御悲しみが何であるかがわかり初めてくるがゆえに、自身住持の樂に囚わられて、歡喜をこの上得たいなどは貪らなくなる。ましてや、世のはてしなき闇路におどる同胞を見た時、身の幸を知れば知るだけ、報謝の念禁じがたく、世の一切の苦難にも忍び、愚痴さえ信心の智慧に転成せられて、ありのままの世に合掌して生ききらしていただくのである。念仏の子は、眞の歡びと悲しみを知る。ああ。世間の大衆は邪妄を追うて正法ましますことすら知らない。

久遠劫来、一切の菩薩大士は、悉く難値難見の歡びにおいて、合掌し五体投地し、献供して、正法を聞いた。そこにのみ、世尊の忍可証誠はあつた。念仏の世界もまたしかりである。大経は阿難の未曾見の驚きにおいて開顕せられたのである。

しかし難値難見の大法に今遇うたことは、けつして私どもの力ではなかつたこと、光明による宿善開發のありがたさであることが知られる時、いよいよ難値難見の摂化を謝せずにはいられない。